

社会福祉専門職養成教育における社会福祉哲学の現状と課題

—日本社会福祉教育学校連盟加盟校の教育課程分析を中心に—

○ 北海道医療大学 志水 幸 (1727)

キーワード：社会福祉哲学、社会福祉専門職養成教育、教育課程

「我々は哲学の丘に登る。それは絶えず目に見える天空を見上げるためではなく、下界の人間の世界を一つの全体として抱擁するために」(Arnold Toynbee)

阿部志郎・河幹夫(2008)人と社会 - 福祉の心と哲学の丘. 中央法規, 190頁.

1. 研究目的

社会福祉学は、異なる源流をもつ“ソーシャルワーク(交換的正義)”と“社会福祉政策(分配的正義)”との位相を包摂する学問分野である。この二つの正義は、時に矛盾する。

かつて、イギリスのグラスゴー大学において、行政主導型福祉サービスのあり方に係る疑問を端緒とした若手研究者のプロジェクトが組成された。その研究成果が、N. Timms, D. Watson (1978) *Philosophy In Social Work*ⁱである。近年、当該著作の邦訳者である関家新助は、大学教育と国家資格との関連について触れる中で、「学問的な視点から、わが国の社会福祉学はかつてのイギリスのような努力がなされているだろうか」ⁱⁱと嘆いている。

さて、このセッションでは、社会福祉哲学について、その意義・枠組み・内容を検討するものであるが、他方その学的探求結果が教育課程の中に明確な形で位置づけられなければ意味をなさない。そこで、本研究では、社会福祉専門職養成教育における社会福祉哲学の立上げの構想に資するべく、その現状と課題を明らかにすることを目的とする。

2. 研究の視点および方法

周知のとおり、“哲学(philosophy)”の語源は、ギリシア語の“philos(愛している)”と“sophia(智慧)”との合成語としての“愛知”である。この愛知とは、いかなることであろうか。おそらくは、虚偽の前提を破る、つまりは「知と無知との二重世界の前庭にある『知』(真理)そのものの廃棄を目指すものである」。ⁱⁱⁱ換言すれば、解の探求よりも、寧ろ問いの精練を重視する立場であろう。

阿部志郎は「福祉の哲学」(問い)について、「福祉とはなにか、福祉はなにを目的とするか、さらに人間の生きる意味はなにか、その生の営みにとって福祉が果たすべき役割はなにかを、根源的かつ総体的に理解することであるが、それには、福祉が投げかける問いを学び、考えることである」^{iv}と指摘している。また、秋山智久は、社会福祉哲学の枠組みとして、「社会福祉士教育、つまり国家試験にはない社会福祉原論や社会福祉の価値・倫理」^vを挙げている。まさに、先の問いは、これらの研究領域(科目群)の主題である。

翻って、社会福祉専門職養成教育に係る教育課程編成の内的基準として、IASSW および IFSW による「ソーシャルワークの教育・養成に関する世界基準」^{vi}、日本社会福祉教育学校連盟・社会福祉専門教育委員会による「社会福祉学コア・カリキュラム」^{vii}がある。また、外的基準としては、通知「社会福祉士養成施設及び介護福祉士養成施設の設置及び運

営に係る指針について」^{viii}等がある。

そこで、本研究では、第一に、内的・外的基準における社会福祉哲学の位置づけについて検討する。第二に、日本社会福祉教育学校連盟加盟校の教育課程における社会福祉哲学の位置づけについて検討する。第三に、以上の現状を踏まえ今後の課題について言及する。

3. 倫理的配慮

本研究は、多数の文献・資料等を素材とする文献研究である。したがって、文献・資料等の引用にあたっては、日本社会福祉学会研究倫理指針の規定を遵守するものである。

4. 研究結果（結果の詳細については、当日配布資料を参照されたい）

紙片の都合により、ここでは一例として、厳格な規律密度を有する社会福祉士養成教育課程における原理教育に係る位置づけを確認する。〈通知 - 教育内容〉の中で、“哲学”“倫理”（なお、“価値”“思想”の使用例は無い）の語が使用されている箇所は、[現代社会と福祉]の「②福祉の原理をめぐる理論と哲学について理解する」、[相談援助の基盤と専門職]の「⑥相談援助に係る専門職の概念と範囲及び専門職倫理について理解する」、[相談援助実習指導]の③および[同実習]の②の「社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を修得する」であった。

また、日本社会福祉教育学校連盟加盟校 159 校（同連盟ホームページ掲載校/2013 年 4 月 1 日現在）の教育課程について各校のホームページをもとに確認した結果、“福祉” & “哲学” / “価値” / “倫理” / “思想”を名称に冠する科目の設置は、哲学 6 校、価値 0 校、倫理 8 校、思想 5 校のみであった。また、その全てが 4 年制大学であった。

5. 考察

端的に言えば、社会福祉哲学の立上げには、もはや自明のことであるが、資格養成教育との一定の距離（学問としての独立性）が必要である。その前提のもとで、学的営為が教育内容を主導し、さらには臨床場面における実践力の向上を担保し、ひいては利用者の最善の利益の実現に資する“四者の循環関係の構築”が喫緊の課題となる。

ⁱ N・ティムズ、D・ワトソン編、関家新助他訳（1988）社会福祉の哲学 - ソーシャル・ワークを中心に。雄山閣。

ⁱⁱ 関家新助（2011）社会福祉の哲学 - 人権思想を中心に。中央法規，171 頁。

ⁱⁱⁱ 柄谷行人（2012）哲学の起源。岩波書店，213 頁。

^{iv} 阿部志郎（1997）福祉の哲学。誠信書房，9 頁。

^v 秋山智久（2012）職業教育 - 専門職養成 - 社会福祉士養成 - 教育は応えているか。日本社会福祉教育学会誌第 6 号，96 頁

^{vi} 国際ソーシャルワーク学校連盟（IASSW）・国際ソーシャルワーカー連盟（IFSW）・日本社会福祉教育学校連盟（2009）ソーシャルワークの定義、ソーシャルワークの倫理：原理についての表明、ソーシャルワークの教育・養成に関する世界基準。相川書房。

^{vii} 日本社会福祉教育学校連盟・社会福祉専門教育委員会編（2010）コア・カリキュラムに関する資料集。日本社会福祉教育学校連盟。

^{viii} 社会福祉士・介護福祉士・社会福祉主事制度研究会監修（2009）改訂版 社会福祉士・介護福祉士・社会福祉主事関係法令通知集。第一法規。